

# シロイチモジヨトウ再多発の要因を考える

八瀬順也

兵庫県立農林水産技術総合センター

シロイチモジヨトウ *Spodoptera exigua* は広く世界に分布する野菜害虫で、日本では1980年代にネギで多発して知られるようになった。この発生は90年代半ばに終息し、以降約20年間本種は潜在的な存在だったが、近年西日本で再び発生が顕在化して問題になっている。

野菜類では多くのガ類害虫が知られている。栽培現場において防除の対象とされる主要種は限られているが、その地位は安定しているわけではなく、少なくともこの数十年間でも変遷が見られている。コナガは1980年代にその薬剤抵抗性から難防除害虫として全国的に問題になったあと、90年代後半から発生が沈静化していった。しかし近年、現行薬剤に対する抵抗性ととも再び問題が顕在化している。オオタバコガは1994年に突発的に発生し、90年代後半にはハイマダラノメイガが、2000年以降にはイラクサギンウワバといった種が害虫として顕在化し、現在も主要種になっている。

害虫の顕在化に関わる要因には、栽培作物や作型の変更、温暖化等の環境の変化、飛来・侵入、防除圧に対する耐性などが考えられるが、これらとは別に、近年多発しているシロイチモジヨトウの特徴として、広域かつ同期的な発生であることと地域間における薬剤感受性傾向の類似があげられる。被害作物として報告の多いネギは、近年周年栽培が急速に増えていて、春季から本種幼虫の発生がみられていることから、安定した繁殖源として好適な環境を提供している様子がうかがわれる。昨年(2018年)、西日本の複数地点間で比較検討されたフェロモントラップの調査結果からは、誘虫数急増のタイミングのいくつか一致していることと、それらの時期は台風接近に重なっていたことが指摘されている。本種は長距離移動することでも知られており、主に気流が関係すると考えられるが、特定の気象条件時に広域で飛来があったことが示唆される。また、被害拡大の背景には、各地で一様に薬剤感受性が低く効果的な薬剤に限られるという事情があり、同期的な多発でありながらこれら地域間にみられる類似性には、特定の個体群の広域飛来が疑われる。

現時点では推測の域を出ないが、近年のシロイチモジヨトウ多発は、繁殖に好適な耕種的環境が増えたところに、薬剤感受性の低い個体群の飛来があって引き起こされている可能性が考えられる。そう仮定すると、今後の対策は、国内における詳細な調査とあわせて、気流解析等による飛来経路の解明と推定飛来源における発生に関する情報収集が必要になってくる。

A try to find the cause of the obvious occurrence revival of the beet armyworm *Spodoptera exigua* after spending latent years.

Junya Yase

Hyogo Prefectural Research Institute for Agriculture